

# 体験とことば

山口県立大学 鈴木隆泰

周知のように梵天勸請説話は、菩提を獲得したにも拘わらず、衆生に対する説法を躊躇する釈尊が、説法を勸請する梵天との間で三止三請を経た後、ついに説法を決意する、という内容となっている。釈尊は、「たとえ私が覚りの境地を説いたとしても、他の人々は私の言うことを理解してはくれないだろう。そうだとしたら、私には“伝わらない、”という悩みと、“やっぱり伝わらなかった、”という徒労感のみが残ることになる。」「私が難行の末にやっとのことで証得した涅槃の境地を、今や説く必要は何もない。貪りと瞋りに打ち負かされている者たちには、この境地を理解することなどできないからだ。それは、流れに逆らって川を遡るようなものであり、甚深微妙にして難見である。貪欲に染まり、闇黒に覆われている者たちは、どうてい見ることができない」という、およそ「慈悲深いお釈迦さま」というイメージからはほど遠い理由によって、説法を躊躇していたのである。涅槃の境地を説いたとしても、なぜ衆生はそれを理解できないのか。それについて釈尊は、「私が覚ったこの境地は、甚深微妙であり、賢者だけが体験できるものである。ところが、アーラヤを楽しみ、アーラヤを喜び、アーラヤに執着している衆生たちにとって、この覚りの境地は理解することはできない」としている。

「アーラヤ」とは、「家、住処、入れ物、容器、置き場、貯蔵所、貯蔵物」を意味する言葉であるが、執着の対象となる貯蔵物・蓄えられているものは、この文脈では「これまでの経験・体験・習慣（言語習慣を含む）」を指している。人は、これまで蓄えてきた経験・体験・習慣に依拠し、それに基づいて生きている。ものごとに対する判断や認識も、各々が蓄えたアーラヤに基づいて行われる。この「アーラヤに依拠する生き方」は、人が遭遇するものごとを、その人のアーラヤからの演繹によって解釈できる、という点において極めて有効かつ便利であるため、人が世界を認識し、その中で生きていく際の原則的方法論にもなっている。ところがこの「アーラヤに依拠する生き方」には、その人のアーラヤに蓄えられていない事象に遭遇した際に、その事象の認識をかえって誤らせてしまうという欠点も有している。例を挙げてみよう。リンゴの見た目や味をことばで伝えることは可能だろうか。もしあなたが、「リンゴとは、丸くて赤くて青くて硬くてシャキッとしていて甘くて酸っぱくて美味しい果物だ」と告げられたとしたら、おそらくあなたは「その通り」と答えるだろう。リンゴの見た目や味は、あなたにことばで伝えることができた。でも、それはあなたにはリンゴを味わった経験があったからである。もし、ここにリンゴを見たことも食べたこともない人があったとして、その人に同様のことが可能であろうか。否、それは不可能なのである。リンゴを味わった経験のない人は、リンゴの見た目や味をことばで告げられたとき、自らのアーラヤに基づいて勝手に判断してしまう。例えば、「リンゴは、卵のように丸くて、血のように赤くて、カビのように青くて、石のように硬くて、ナシのようにシャキッとしていて、砂糖のように甘くて、レモンのように酸っぱい」などというように。なんと奇っ怪な果物であろう。そのような果物を誰が食べようと思うであろうか。リンゴはとても美味しい果物であるにも拘わらず、リンゴを食べたことのない人に対して、無理にことばで伝えようとしたばかりに、その人はせっかくの美味しいリンゴを食べようとする気持ちを発すどころか、まさに「食わず嫌い」になってしまう結果となった。

涅槃の境地も全く同様なのである。釈尊以外には誰も経験したことのない涅槃の境地を、無理にことばで伝えようとしても、人は各自のアーラヤに基づいて勝手に曲解してしまい、その結果、涅槃を誤解し、中には涅槃を求めようという気持ちを失うものも出てくるであろう。実際、釈尊は「誰も経験したことのない覚りの境地を無理矢理ことばで伝えようとすると、人々を悩ませるおそれがある」と述懐している。しかし、「ああ、世間は滅んでしまう。正しく覚ったお方が沈黙し続け、説法しようとはされないとは」「どうか法をお説き下さい。甘露の門をお開き下さい」という梵天の勧請を三度に渡って受けた釈尊は、慈悲心をもって世間を観察し、ついに説法の決意をする。ブツダガヤーを出立した釈尊は、最初の説法をかつての修行仲間に対して行うべく、彼らがいるバラナシ郊外の鹿野苑へと向ったのであった。

しかし、先の躊躇にあったように、涅槃という釈尊の内的な真理体験を、ことばで伝えることは依然として不可能である。釈尊はそれを十分に承知した上で、説法を決意した。当然、そこで説かれる教え（法）は、涅槃という真理そのものではありえない。これは、「初めに言<sup>ことば</sup>があった。言<sup>ことば</sup>は神と共にあった。言<sup>ことば</sup>は神であった」（日本聖書協会刊行『新約聖書 新共同訳』「ヨハネによる福音書」一・一三）に代表されるように、「神＝真理＝ことば」という理解が成立している天啓教との大きな相違点でもある。仏教においてことばは、真理をまるごと担うことはできないのである。そうであるにも拘わらず釈尊が説法を決意したのは、真理そのものではなく、真理に至る手段を伝えるものとして、ことばを使おうと考えたからである。

五比丘に対する最初の説法（初転法輪）の内容は、四諦の教説であった。四諦は、苦諦（苦という真実）、集諦（苦の原因に関する真実）、滅諦（苦の制御に関する真実）、道諦（苦の制御に至る方法に関する真実）よりなり、最後の道諦は、「比丘たちよ、如来が修証した、正しい覚り・涅槃へと通ずる中道とは何かと云えば、それは八正道である。すなわち、正見ないし正定である」と、四諦・八正道として示されていた。そこには涅槃の境地は一切開示されていない。どこまでも、現実認識、原因の究明、未来への可能性、そしてそこに至る方法が示されているだけである。

仏教における教説（法）は成仏の境地そのものではない。成仏へと至る手段（方便）である。そしてそれが成仏へと至る方便である限り、どのような法であれ是認される。八正道の教説の中で「何が正しいのか」が具体的に示されていなかったのは、ある人を涅槃へと導く道であれば、それがその人にとっての正しい道だ、という理解が根底にあるためである。それゆえ、仏教における法は「八万四千の法門」といわれるように、天啓教のそれに比べると遥かに膨大な量を誇るまでになった。これも、「真理はことばには投影しきれない。ことばは真理へと至る手段である。手段は個々人によって異なってよい」という考え、そして、「自分に合った手段で、ゴールである成仏を目指して欲しい」という釈尊の願いに基づくものであった。仏教においてことばは、真理へと至る必須の手段なのである。

しかし仏弟子たちはやはり誤解してしまった。釈尊の当初の懸念が、残念なことに現実化してしまったのである。阿羅漢や独覚を最終ゴールとする仏弟子と、彼らを小乗と呼び、彼らから成仏の可能性を剥奪した仏弟子、双方とも「全ての仏道修行のゴールは成仏」という釈尊の真意をくむことなく、自ら獲得したアーラヤに固執してしまった。彼らの誤解を解き、仏教の混乱を收拾し、仏教を本来の姿へと回帰させるべく登場してきた経典が、『法華経』なのである。